夏目漱石における職業観について

On the Philosophy of Vocation in Natume Soseki

笠井　哲
福島工業高等専門学校、一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（平成20年9月8日受理）

The purpose of this paper is to consider the philosophy of vocation in Natsume Soseki. At first he makes a vocation when it is heteronomous thing. However. a scientist and a philosopher and the artist are autonomous vocations. and it is said that he makes a vocation agree with a hobby. In addition. he makes the contents or a form the problem about a vocation. He rouses attention for an evil of formalism while doing it from a form when it is the secret of the progress of work that enter. In addition. he assumes that the evaluation should entrust another person about self-expression in the vocation. It is to make every possible effort for current work to be important while demanding autonomous work.

Key words: philosophy of vocation. autonomous vocation. contents, form, self-expression

1. はじめに

夏目漱石（1867－1961）は、英語教師になるべく英文学研究を始めた。その後留学を果たし、東京帝国大学最初の日本人英文学教授に擬せられた。これは、漱石の研究上とともに職業上の成功を意味する。

しかし彼は教授就任を辞して、朝日新聞に入社し小説家として立つ。当時の漱石は、『我輩は猫である』で評判を得てはいたが、アマチュア作家の域を超えていなかったから、教師放擲は無謀の誹りを免れえない。しかも彼の周辺には、身内の数々が食らいついて、いくら金があっても足りないという窮地に立たされていたのである。上垣外憲一はこれを、

> 文学者としての「生き方」の選択であった[1]。

という。職業から得られる収入も、全身を打ち込みたい作家活動も、数少ない趣味として持ち続けてきた漢文学への傾倒も、いずれも満足の行くような人生の選択をこの機に行ったのである。

職業に対する見方、如何なる職業を望ましいと考えるかを職業観という。本稿の目的は、夏目漱石における職業観について考察することである。

2. 他人本位と自己本位

漱石は、自分の小説家という職業をどのように捉えていたのであろうか。『文学談』という談話の最後に次のように述べている。

> 世の中では小説家をもって、教員とか、官吏とか商人とかと同じ様な単純なる職業だと思っている。相互道徳上の交渉、問題に付いては、自分と小説家は同程度の批判力しかないと考えている。夫は間違っている。小説家も夫で甘んじてはならん。
>
> 学問は教師にきかねばならん。事務は官吏に任せねばならん、金儲は商人に頼まねばならん事がわかれば、吾人が世の中にある立脚地やら、徳義問題の解決やら、相互の葛藤の批評やら、凡て是等は小説家の意見を聞いて参考にせねばならん。小説家も其覚悟がなくてはならん[2]。

なるほど小説家という職業は、社会と人間の全ての問題を対象にするから単純ではない。あらゆる対象を批判的に考察する能力を磨かねばならない。しかし、小説家の持つ批判力を、教師や官吏や商人が持つ批判力より上位におくのは飛躍である。批判力は小説家に必要であるが、どのような職業にも欠かせないものである。如何なる職業であれ、仕事を通して見識を持つようにすべきである。

また「職業倫理」について漱石は、小説『野分』

の中で次のように書いている。

英語を教え、歴史を教え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に付随して蓄えられた、芸を教えたのである。単に此芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえ居れば済む。書物を開いて飯を食って満足して居るのは、綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿回しが皿を回して飯を食うのと理論において異なる所はない。学問は綱渡りや皿回しとは違う。芸を覚えるのは末のことである。人間が出来上がるのが目的である。大小の区別のつく、軽重の等差を知る、好悪の判然する、善悪の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬まらざる大丈夫が出来上がるのが目的である[3]。

これは主人公の文学者・石井道也の意見であるから、漱石自身とまったく同じとはいえない。漱石は先述のように「学問のことは教師に聞け」という。教師を芸人すなわち技術者と見なしてのことである。しかしここでは、学問にとって芸は末のこと、第二義的であるという。学問は人格の修養、つまり賢愚、真偽、正邪に関する能力を身につけ、人間を作ることが目的であるという。

綱渡りは芸であるが、芸人にも人格の修養は必要であり、学者にだけ人格が必要だというのは漱石の偏った見方である。如何なる職業においても「人格の修養」つまり「職業倫理」があると考えられる。この職業倫理を失えば、どれほど芸が優れていても職業自体が成立不能になる。

さて漱石は、明治39年３月17日の瀧田哲太郎宛の「書簡」で、次のように述べている。

文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる位でないと張合がなし[4]。

好きな仕事を職業にしたとしても、職業になると楽しいことだけではない。むしろ辛いことの方が多いかもしれない。しかしその職業の辛さが張り合いになるともいえる。なぜ、職業になると辛いこともしなければならないのか。漱石は『道楽と職業』という評論の中で、次のように述べている。

職業というものは要するに人の為にするものだという事に、どうしても根本義を置かなければなりません。人の為にする結果が己の為になるのだから、元はどうしても他人本位である。既に他人本位であるからには種類の選択分量の多少凡て他を目安にして働かなければならない[5]。

職業は本来他人本位である。すなわち、その原則は「お客様が神様」ということである。ただし、職業は「芸」を売り買いするが「心」の売り買いはしない。しかし、芸術の仕事のように「心」の部分が多い仕事を職業とすると、葛藤に悩むことになる。

先の引用の続きを翻案してみる。自分を曲げて人に従わないと商売は成り立たない。しかし、これこそ心理的に嫌なものである。とりわけ、嫌なものは好きな道が強制によって嫌悪に変わるときである。

ところが職業とは自分ではなく、他人の需要のために働くのを目的とする。最初から自分の不必要であり、嫌なことも強いてすることなのである。商売となると何でも嫌になる、という理由がここにある。

道楽が面白いのは、好きな仕事を好きなだけやるからで、この道楽が職業となった瞬間、自分の手から他人の手へ支配権が移るから、快楽がたちまち苦痛に変じるのもやむをえない。己を捨てると、元来不道徳もあえてする。無知なこともいう。義理を顧みず阿漕なこともする。下劣な趣味にも走るというように、十中八九悪い方に傾きがちになるから困る。

要するに職業と名がつけば、趣味でも徳義でも知識でも、すべて一般社会が本尊となり、この本尊の鼻息をうかがって生活するのが自然の理となる。

また、次のようにもいっている。

ただ茲にどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科学者哲学者もしくは芸術家の様なもので、是等はまあ特別の一階級とでも見做すより外に仕方がないのです。哲学者とか科学者というものは直接世間の実生活に関係の遠い方面をのみを研究しているのだから、世の中の気に入ろうとしたって気に入られる訳でもなし。世の中でも是等の人の態度如何で其研究を買ったり買わなかったりすることも極めて少ないには違ないけれども、ああ云う種類の人が物好きに実験室へ入って朝から晩まで仕事をしたり、又は書斎に閉じ籠って深い考に沈んだりして万事を等閑に付している有様を見ると、世の中にあれ程己の為にして居るものはないだろうと思わずにはいられない

位です[6]。

この「自己本位の職業観」は、瀬沼茂樹にように、資本主義社会における良識であり、また学者・芸術家の地位を説明している[7]。

とする見方もあるが、現在では古い考え方といえる。哲学も科学も芸術も、内容自体は距離を置きながら、ビジネスの対象になっている。哲学を講じる、哲学書を書く、科学の成果を応用する、絵を教える、絵を売る等は商売であるといえよう。いずれにせよ、漱石は小説家を道楽的職業と考えており、道楽と職業を一致させる生き方を選んでいる。

3. 中味か形式か

漱石は『中味と形式』という評論で、学者という職業について次のように述べている。

彼等<学者>は彼等の取扱う材料から一歩退いて佇立む癖がある。云い換えれば研究の対象を何処迄も自分から離して眼の前に置こうとする。徹頭徹尾観観察者である。観察者である以上は相手と同化する事は殆ど望めない。相手を研究し相手を知るというのは離れて知るの意で其物になりすまして之を体得するのとは全く趣が違う[8]。

この文章は講演会のもので、聴衆に理解しやすくするため、単純な二分法の弊害に陥っている。仕事には大別すると二種類の臨み方がる。一方は形式的・観察的・客観的・受動的・傍観的な仕方であり、他方は内容的・同感的・主観的・能動的・当局的な仕方である。

漱石は、形式的、傍観的方法を非難しているように聞こえる。それは、次のようにいうからである。

幾ら科学者が綿密に自然を研究したって、必竟ずるに自然は元の自然で自分も元の自分で、決して自分が自然に変化する時期が来ない如く、哲学者の研究も亦永久局外者としての研究で当の相手たる人間の性情に共通の脈を打していない場合が多い。学校の倫理の先生が幾ら偉いことを言ったって、詰り生徒は生徒、自分は自分と離れているから生徒の動作丈を形式的に研究することは出来ても、事実生徒になって考える事は覚束ないのと一般である[9]。

勿論、漱石は、形式主義的で傍観者的な仕事、研究を全面否定しているわけではない。観察する事物を冷静に見きわめることができる便宜があるという。いずれにせよ、漱石の言説は次のように訂正すべきである。

①学問、科学や哲学の研究方法は、対象から離れて徹頭徹尾観察し、分析するのを第一義とする。対象に同感し、対象に浸透する場合も、対象と一体化するためではなく、対象を理解し、対象から抜け出るためである。

②したがって、漱石は本来区別しなければならない点を無視してものをいっている、といわざるをえない。外面を眺めるだけの形式的・観察的・客観的・受動的・傍観的な仕方がある。これに対して対象に侵入し、対象に浸透した上で対象から抜け出て独立する形式的・観察的・客観的・受動的・傍観的な仕方もあるからである。後者が如何なる学問であれ、一般的に妥当する研究方法である。

③倫理の先生は、子どもに同感し、子どもの気持ちを理解する努力を必要とする。しかし、先生が子どもに同感したからといって、子どもを理解したからといって、常に必ずしも子どもの立場に立つ必要はない。むしろかなり多くの場合、子どもに対する批判的、客観的、傍観的立場に身を置くことの方がしばしば重要になる。教師の立場とは、本来子どもから独立したものである。

④したがって、内容的、同感的、主観的、能動的、当局的やり方は、学問であろうが教育であろうが、過渡的、中間段階の態度なのである。何であれ、対象と同化するほど熱中し自分を失うことさえ厭わないことがあっても、もう一人の自分がその熱中振りを観察しているというのが重要なのである。

また、形式から入るのが職業における仕事の上達の秘訣であるとして、次のようにいう。

形式は内容の為の形式であって、形式の為に内容が出来るのではないと云う訳になる。もう一歩進めて云いますと、内容が変れば外形と云うものは自然の勢いで変って来なければならぬという理屈にもなる。傍観者の態度に甘んずる学者の局外の観察から成る規則法則乃至凡ての形式や型のために我々の生活の内容が構造されるとなると少しく筋が逆になるので、我々の実際生活が寧ろ彼等学者（時によれば法律家

と云っても政治家と云っても教育家と云っても構いません。兎に角学者的態度で観察一方から形式を整える方面の人を指すのです）に向って研究の材料を与え其結果として一種の形式を彼等が抽象する事が出来るのです。其形式が未来の実施上参考にならんとは限らんけれども本来から云えばどうしても是が原則でなければならない。然るに今此順序主客を逆まにして予め一種の形式を事実より前に備えて置いて其形式から我々の生活を割出そうとするならば、ある場合には其処に大変な無理が出なければならない[10]。

漱石の指摘で重要なのは、形式は「実際生活」「現実」「事実」が提供する材料から抽出、抽象されたものであるということである。しかし、事実（内容）と抽象（形式）の先後関係を逆転して、この抽象された形式で現実を尺度したり、その形式どおりに現実を解釈したり処理しようとしたりすると、誤りに陥るという点に注意すべきである。これは形式主義の弊害である。つまり、判例主義や先例主義とも呼ばれる、範型で先験的に現実や生活を判断したり、鋳型にはめようとしたりして生じる弊害である。

しかし、漱石も認めているように「形式」は、一種の仮説として未来のプランの参考になる場合がある。現実に先立って蓄積されている形式を参考にせずに、生の現実に挑んでゆくのは無鉄砲のそしりを免れないといえる。

4. 職業による自己表現

自分の職業に関する他人の評価は、励みにもなれば堕落の原因にもなる。『文展と芸術』という評論で、漱石は次のように述べている。

悲しいかな実相を自白すると、我々は常に述作の上に於て、幾分か左右前後を顧みつつ、堕落的に仕事をしている場合が多い。そのうちで我々を至醇の境界から誘き出そうとする最も権威ある魔は他人の評価である。此魔に犯されたとき我々は忽ち己れを失脚してしまう。そうして恰も偶像礼拝者の如き陋劣な態度と心情を以て、見苦しき媚を他に売ろうとする。そうして常に不安の眼を輝かし空疎な腹を抱いて悶え苦しまなければならない。其所が問題なのである[11]。

人間の最大の願望は何であろうか。それは「評価されたい」ということではないであろうか。仕事はもとより、趣味、家族、出身校、何であれ自分に関係あるものが評価されるとうれしく、励みになる。逆に、他人から何の評価も得られず、冷笑と黙殺、非難と罵倒で迎えられると意気消沈し、気分を害してしまう。

逆に、自分や自分の関わったものが他人から過大に評価されると、増長し努力をやめ堕落する原因となる。したがって漱石でさえも他人からの非難には左右されたくない、良い評価だけを採用したいといっているほど、他人の評価は難しいものである。

他人の評価など気にする必要はないというが、人間本性として無理である。人間は本性上他人に評価されたい存在だからである。その好評にも、様々ある。正当な評価から、過当な評価まで、両極端である。そして過当な評価は、悪評よりもさらに悪い結果を生むのである。人は好評を得たいがために、他人や上司や批評家や教師に媚びて、あるいは部下に読者に生徒に媚びて、自分の本分を失い他人の評価に一喜一憂するという有様になる。

しかし可能であれば、漱石の次の言葉のように生きるのが望ましいといえる。

自己を表現する苦しみは自己を鞭撻する苦しみである。乗り切るのも斃れるのも悉く自力のもたらす結果である。困憊して斃れるか、半産の不満を感ずる外には、出来栄について最後の権威が自己にあるという信念に支配されて、自然の許す限りの勢力が活動する。夫が芸術家の強みである。即ち存在である[12]。

しかしそのように行かないのが人間である。芸術家といえども人間を超えているわけではないからである。漱石は続けて次のようにいう。

けれども人の気に入るような表現を敢てしなければならないと顧慮する刹那に、此力強い自己の存在は急に幻滅して、果敢無い、虚弱な、影の薄い、希薄のものが僅かに呼息をする丈になる。此時の不安と苦痛は前のそれ等とは違って、全く生甲斐のない苦痛である。自己の存否が全く他力によって決せられるならば、自己は生きているという標札丈を懸けて、実の命を既

に他人の掌中に渡したと同然だからである。だから徹頭徹尾自己と終始し得ない芸術は自己に取とって空虚な芸術である[13]。

他人に評価されたいというのと、自分を捨てて他人の奴隷になるのとは異なっている。この点において、漱石の二分法は極論である。

表現はどのような自己表現であろうと、他者が共有できるものでなくてはならない。表現は言語活動であれ、肉体的なものであれ共通の場を持っている。自己を貫徹することと、他者了解を目指すこととは矛盾しないのである。また、次のように述べている。

芸術は自己の表現に始まって自己の表現に終る。一是は自分の当初に道破した主張で、かねて真正なる凡ての芸術家の第一義とする所でなければならないと思う。努力の終結後に来る其他のものは、述作の白熱が放散すると共に起る不純なる副産物と見れば差支ない[14]。

第二節の「不純なる副産物」は、「第二儀的なもの」と書き換えるべきである。他者の評価を求めることは不純ではない。人間にとって不可避的な衝動である。さらに、次のようにも述べている。

此等の濁った副産物のうちで、比較的清浄なのは、具眼者の品評を念頭に掛けたがる顧慮の心的状態である[15]。

具眼者の品評、すなわち仕事や作品を正当に評価できる目を持った人の評価を顧慮することは重要である。むしろ顧慮するのは、顔の見えるごく普通の理解力を持った特定の読者であり、顔の見えない不特定の購買者である。その人たちに理解不能なことを書かないようにするという配慮である。

また、漱石は仕事を客観視できるようになるべきであることを次のように述べている。

白熱度に制作活動の熾烈な時には、自分は即ち作物で、作物は即ち自分である。したがって二つのものは全くの同体に過ぎない。然し其活動が終結を告げると共に、作物は作物、自分は自分とはっきり分れて来る。外の言葉で言い現わすと、此時自分は始めて一歩作物から遠退くのである。始めて作物に対して客観的態度が取れるようになるのである。要するに始めて一歩でも他人らしくなれるのである。既に他人として、幾分でもわが製作に対する批判が起る以上は、しかも其批判がわが製作の存在上必要である以上は、自己対製作なる彼我の関係を、（己の信ずる）具眼者対製作の関係に拡大するのはや已むを得ざる自然の順序である[16]。

この引用を読解してみよう。①自己目的としての仕事とは、仕事中仕事に埋没し、自分の存在を少しも感じない状態である。自分と仕事内容（作物）に区別はない。

②しかし、自己目的としての仕事でも、いったん仕事が終わると、自分と仕事との一体化は解けてくる。仕事内容は自分から離れ、どんどん他者のものになる。そうすると、客観的に冷静に対応できるようになる。この事情は自己目的としての仕事ばかりでなく、どのような仕事にも共通するものである。仕事結果は、当人の手を離れ他者に渡ってはじめてその価値を見出すということである。

③自己目的としての仕事は、その結果が自分の手から離れ、客観物になったとき、一人歩きしてはじめてその社会的価値を見出すのである。他者がそれを受け取り、消費することに、仕事と一体化していたときの悦びとは別の悦楽、他者がその仕事結果を悦ぶことの中に感じる悦びを味わうのである。

また、仕事が一人歩きし出すと、他人に評価を任せたくなるということを、次のようにのべている。

其上彼等＜作物＞は時日を経れば経る程、己れの製作に対して他人らしく振舞い得るという事実を承認するものである。己の製作に対して他人らしく振舞われるというのは、時日の間隔と共に、わが製作の上に加わるにわが批判が、漸次最屓の私を離れて公平に傾くの謂に外ならない。従って今日の自己は昨日の私を恥じ、昨日の自己は又一昨日の私を恥ずるという論理から、いっその事、全く他人にわが製作を処分する全権を委任して、当初から安心しようとするのである[17]。

自分の仕事は自分が一番理解しているから、自分の仕事の最大の批評家は自分である。同時に自分は自分の仕事に対してどのように客観的に振舞おうとしても公平とはいかない。評価が甘い場合もあれば、辛すぎる場合もある。それで、「今日の自己は昨日の私を恥じ、昨日の自己は又一昨日の私を恥ずる」ということになる。この自己査定の甘さや不安

定さから逃れるには、第三者の「具眼者」に査定を任かせなければならない。

5. 他人本位から自己本位へ—結びにかえて—

漱石は、他人本位から脱却し自己本位に生きるべきであるということを、『私の個人主義』で次のように述べている。

> 私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるというより新しく建設する為に、文芸とはまったく縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字を漸く考えて、其自己本位を立証する為に、科学的な研究やら哲学的の思索に耽りだしたのであります[18]。

これは、漱石がロンドン留学中の経験を回顧しての言葉である。人間は、これまでの興味や関心のまわりで仕事を始め、大抵はそこに終始する。そこで「これだ」という自己本位の仕事を発見できれば、まことに稀な幸運であるといえる。自分独自のやりがいのある仕事を見出すには、いったん自分が立っている狭い土地を離れ、より広い場所に出て行き、本当の自分の棲み処を見出さなくてはならない。したがって、小森陽一のいうように、

> 漱石の言う「自己本位」とは、エゴイズム（利己主義）でも、エゴティズム（自己中心主義）でも、エゴセントリズム（幼児的自己中心性）でもありません[19]。

ということになるであろう。また漱石は、『私の個人主義』で次のようにも述べている。

> 何かに打ち当る迄行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、或は十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああ此処におれの進むべき道があった！漸く掘り当てた！斯ういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずることが出来るのでしょう。容易に打ち壊されない自信が、其叫び声とともにむくむく首を擡げてくるのではありませんか[20]。

自分の棲み処はここだと決めたら、何かに打ち当たるまで進む覚悟が必要であると漱石はいう。自己本位の仕事は、相当深く掘らなければ探り当てることのできないものである。また、次のようにいう。

> それで私は常から斯う考えています。第一に、貴方がたは自分の個性が発展出来るような場所に尻を落ち付けべく、自分とぴたりと合った仕事を発見する迄邁進しなければ一生の不幸であると[21]。

人間の一生には限りがあり、自分の個性に適合する職業を見出せるかどうかは不明である。しかし、漱石もいうように自己本位の仕事を求めながら、現在の仕事に全力を尽くすべきであるといえる。

文　献

1）上垣外憲一、漱石の帰去来—朝日新聞入社をめぐって—、三好行雄他編：講座夏目漱石　第四巻＜漱石の時代と社会＞，p. 104（有斐閣，1982）

2）夏目漱石：漱石全集　第十六巻，p. 518（岩波書店，1967）

テキストはこの岩波全集により、以後巻数とページと（発行年）を略記する。引用に際して、原文における旧漢字を新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。また引用中の＜＞は、本稿筆者が挿入した注記である。

3）第二巻，p. 638（1966）

4）第十四巻，p. 385（1966）

5）第十一巻，p. 312（1966）

6）第十一巻，p. 314（1966）

7）瀬沼茂樹：近代日本の思想家5　夏目漱石，p. 198（東京大学出版会，1962）

8）第十一巻，pp. 355－356（1966）

9）第十一巻，p. 356（1966）

10）第十一巻，p. 359（1966）

11）第十一巻，pp. 390－391（1966）

12）第十一巻，p. 391（1966）

13）同前。

14）第十一巻，p. 395（1966）

15）同前。

16）第十一巻，pp. 397－398（1966）

17）第十一巻，p. 398（1966）

18）第十一巻，p. 444（1966）

19）小森陽一：漱石を読みなおす，p. 248（筑摩書房，1995）

20）第十一巻，pp. 447－448（1966）

21）第十一巻，p. 451（1966）